

あらおし悠 挿絵 相川たつき

2DB
二次創作データベース



百合嫁バトル!

~許嫁と親友と時々メイド~

試し読み版

第一章 突然の嫁と親友の告白

第二章 最後のデート？

第三章 教えてくださいメイドさん

第四章 スキャンダラス女子校生

第五章 百合嫁バトル本格開戦

006

063

111

176

234

Character

登場人物紹介

もも の せ と お る

桃乃瀬 透

困っている人を見過ごせない優しい少女。二人の同級生から愛の告白を受ける。

フジクラ シ の

藤倉 詩乃

透の許嫁として同棲しにやってきた少女。箱入り娘だからか世間知らずな一面も。

おおすみ ふうみ

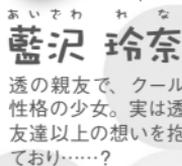
大墨 史未

詩乃と一緒にやってきたお付きのメイド。お調子者ながら頼れるお姉さんでもある。

あい で わ れ な

藍沢 玲奈

透の親友で、クールな性格の少女。実は透に友達以上の想いを抱いており……？



その瞬間、信じられないほど甘い痺れが全身を一瞬で駆け抜けた。舌の表面のザラザラが、まるでヤスリをかけたように擦れ合い、背中がピクンと大きく跳ねる。思考まで削られそうなほど荒々しいのに、むしろそれが癖になって、自分から動かしてしまふ。舌と舌が触れ合うたびに全身から力が抜けて、透はお尻で机に寄りかかった。ガタンと大きな音が鳴るけれど、吸いつく彼女の唇と舌が、我に返るのを許さない。

「あ……あふ、玲奈……あ……」

突き飛ばそうとしていた手で、玲奈の肩にしがみつくと、彼女はさらに体重をかけてきて、首を左右に振りながら舌を捻じ込んでくる。唾液も流れ込み、透の口を満たし始める。

（玲奈の……女の子の唾、なのに……）

初めて舌で味わう他人の唾液。それが親友のものだと思おうと抵抗はなかった。口腔内に溜まったそれを、無意識に嘔下する。

「あは……透う……」

それが嬉しかったのか、玲奈の動きが大胆になった。透の舌を絡め取り、弄ぶ。二人分の唾液が混ざり合って、ピチャピチャと音が鳴る。それは耳と羞恥心をくすぐるだけでなく、透の身体にも異変をもたらした。

（やだ、何だか……お股、ムズムズする……）

透だってオナニーの一回や二回は経験ある。でも、こんなにも激しい疼きは初めてだった。指で触って鎮めたいけれど、そんなはしたないところ、親友に見られたくない。

「ね、玲奈……もういいでしょ」

早く家に帰って激しく慰めたかった。この際、学園のトイレでもいい。もっとキスして
いたい欲求に嘘をつき、親友を突き離そうとする。

「透、我慢できなくなっちゃったんでしょ」

「え？ ……あッ!？」

いきなり、彼女の指が内腿を逆撫でした。キスに夢中になるあまり、そこがだらしなく
緩んでいた事に気づいていなかった。慌てて閉じようとしたら、薄い爪の先で、内腿を何
度も撫で上げられる。そのたびに、電気でも流されたように痺れて自由が利かない。脚が
強張って動けない。

「ダメ、玲奈、これ以上は……。キ、キスだけって約束じゃ……。あッ!」

「そんな約束してない。そうだ、まだ誕生日プレゼントをあげてなったよね。じゃあこれ
がプレゼントって事で、気持ちよくしてあげる」

確か「せめて」と言っていた気がするけれど、スカートの中に手が入ってきた衝撃で、
曖昧な記憶がさらに不鮮明になった。しかも、この一方的な行為がプレゼントなんて、ま
ずまず理屈が通らない。裾がめくれて露わになった鼠径部を撫でられて、信じられないほ
ど心地いい電流が腰や背中を走り回る。でも、ここから先に進むのは、怖い。

「ね、玲奈。今日はここまで……。玲奈……。はぁんっ!」

突き放そうとした手が硬直した。玲奈の中指が、下着の中心に触れている。性器の窪み

をなぞって小刻みに動き、堪らない快感で腰が跳ねる。

「ダメ玲奈！　そ、そんなとこ触っちゃ……あう、あうん！」

親友に秘部を触られている。その事実だけで、あまりの恥ずかしさに頭が焼き切れそうだ。なのに、口先だけで身体が拒もうとしてくれない。キスをした時から溜まり始めたウズズが、彼女の指で悦びに転換されていく。

それでも、透の中に残った理性が呼びかける。

（こんな事されて……明日からどんな顔して会えばいいの!?!）

今ならまだ引き返せる。若干の手遅れ感は否めないけど、それでも肉欲に逆らって髪を振り乱し、親友に呼びかける。

「だめ……駄目だよ玲奈！　と、友達でこんな……あんっ！　こんな事……」

愛撫は止まらない。鉤状に曲げた指で、下着の上から恥裂を何度も何度も擦り上げる。そのひと往復ごとに、身体の内側で何かが沸き上がる。未体験の熱さに恐怖さえ覚える。もう一度呼びかけようとした透は、しかし、ハツとなって言葉を飲んだ。彼女の瞳が、再び水を湛えたように潤んでいる。思い詰めた表情で唇を噛み締めている。

「透……好き……好き……」

「そんな、玲奈……あ、あ……あっ！」

そんな顔をされたら、そんな切ない声で呼ばれたら、やめさせる事なんてできない。それよりも、透自身がやめて欲しくなかった。彼女の指が股間に与える媚振動は、オナニー

なんかの比じゃない。中断するきっかけを失って、快感に飲み込まれてしまう。

ふと、昨夜の少女の裸身が、脳裏でフラッシュのように瞬いた。あの時に拒まなかったら、どんな世界が待っていたんだらう。

（違う、今は玲奈の事だけを考えて……。そ、そうだ……。そうだよ……。誰と付き合うかなんて、あたしが決める事じゃないの？）

本能的な性への好奇心と、勝手に結婚相手を決められた反発心。それが、透の躊躇を壊し始める。次第に、親友の愛撫を積極的に受け入れさせる。

「ひあ、あん、そこ……。あんっ！」

身悶えするたびカタカタ小さく鳴る机が、ここが放課後の教室なのだと思い出させる。でもそれより、この快感を逃したくなかった。彼女の手が動きやすいように脚を開く。すると、それを待っていたかのように、指が下着の底から潜り込んできた。

「はあう！」

直接性器を触られるとまで思っていた透は、再燃する羞恥で身を硬くした。しかも、ぐじゅつと湿った卑猥な音が、異様に大きく耳に響く。

「透……。すつごく濡れてる……」

「ひっ……!?!」

玲奈の囁きに悲鳴を上げた。言われて初めて、下着の内側の異様な熱さを自覚した。欲情を親友に指摘され、羞恥が再燃する。逃げ腰になってお尻を浮かせる。

「だめ、逃がさない……」

「ふあ？ はあああう！」

しかし、陰唇への直愛撫が透を再び机に叩き落した。下着越しとは別世界の鮮烈な刺激が、脳天を突き抜ける。全身を覆い尽くす激しい快感痙攣に、身も心も囚われる。

「あ、あ、あッ、そんな……凄いの……凄い！」

「透、声、大きい……」

首を仰げ反らせて快感を叫ぶと、その口をキスで塞がれた。透は自ら舌を伸ばして夢中で絡める。身体の中から沸き上がる衝動に駆られるままに玲奈の首に両腕を回し、音を立てて唾液を啜る。

「玲奈、玲奈、あたし……ふあ、あ、あ……あッ！」

「イキそうなのね透……。いいよ、イカせてあげる……」

玲奈の指が速度を増した。全身が震えて唇が外れそうになる。透はしがみついた両手で彼女の髪を掻き回し、されるがままに絶頂へと走り出す。

「玲奈、玲奈、れなっ！」

何も考える事ができず、彼女の名前を連呼するだけ。快感が高まって身体が浮き上がる感覚になった瞬間、ずるると、思いきり舌を吸い上げられた。

「んあッ!! あぶ、ふみゆうううっ！」

掠れた悲鳴と共に身体が仰け反った。溜まりに溜まった欲求が一気に弾け、全身を激し



「し、詩乃さん……」

「詩乃、とお呼びください、透さま。わたしは、あなたの妻になるのですから」

「その話はなくなつたんじゃなかったの!？」

だから今日、最後の思い出作りにデートをしたのに。しかし彼女は、透の言葉が理解できないかのようにきよとんとしている。

「何でそんな顔なのよつ。あたしが玲奈と付き合つてのを知つて、それであたしの事を諦めて、婚約解消を決意してくれたんだよねつ!？」

「わたし、そんな事、言いました?」

詩乃は顎に人差し指を当て、小首を傾げた。透は、あんぐりと口を開ける。

「言つてない……けど、この家から出て行く雰囲気、バリバリに出してたじゃない!」

思わせぶりな彼女が悪いのか、確認しなかつた自分が悪いのか。どちらかといえば後者だけど、それを棚に上げて責め立てる。

「んー。仮にそうだとしても、学園では毎日顔を合わせるわけです。だって、わたし今週転校してきたばかりです。なのに、またすぐ転校というわけにはいかないでしょう?」

詩乃が、不思議そうな顔で首を左右に傾ける。確かに常識的に考えれば、まったくもつて彼女の言う通りなのだけど、その態度が白々しい。

「でもでも、思い出を作りたいって……」

「はい。透さまとは長いこと会えませんでしたので、その分を埋めたくて。ですから、こ

れからも結婚までに思い出をたくさん作りましょうね」

そしてニッコリ、屈託のない笑顔。

(だ……騙されたあーっ！)

落ち込んだふりでデートに持ち込み、同情を誘う作戦だったのか。とはいえ事実確認を怠ったのは透のミス。勝手に早合点しただけと主張されるのは目に見えている。でも幼少時の話は本当だし、彼女にしてみたら、振られそうな危機を、うまい具合に関係強化へと転換したつもりなんだろう。実際、かなり情にほだされたわけだし。

とはいえ、やっぱり親友は見捨てられない。

「そ、そうだ！ あたしは玲奈と……」

「二度も淫らな行爲をした件ですか？」

言葉を遮られ、あうあうと口元が空回り。それ以前に、どうして玲奈とのエッチを知っているのか。すると詩乃は両手を頬に当て、恥ずかしげに身体をくねらせた。

「だって……わたし、透さまの事をずくっと思っていましたから。当然、藍沢玲奈さまとの淫行も、最初から最後までしっかりと。透さまって、受け身がお好きなのですね。二度目なんて、机に押し倒されて、藍沢さまの指で、こう……」

「わあああ、わああああっ!!」

詩乃の話を大声で遮った。その時の描写が具体的すぎる。これはもう、確実に見られていると考えて間違いない。

「あのね、あの……あれは……」

詩乃を突き放すつもりだったのだから、本当なら言い訳なんて必要なんてないはず。だけれど、やはりエッチの現場を見られていた衝撃が大きすぎて、冷静でいられない。どうにか取り繕えないかと頭を必死に巡らせていたら、とぼけた顔の彼女に頬を撫でられた。「勘違いしないでくださいいね、透さま。わたし別に、藍沢さまと関係をもった事を責めて

いるわけではないのです」

「……え？ だったら……」
この拘束は何のためだろう。鎖をガチャガチャ鳴らしながら首を傾げる。彼女から見たら浮気なわけで、それを責めないというのは理解できない。

「透さま、ひどい。どうしてわたしを可愛がってくれないのですか？」

「はい？」

急に詩乃が拗ねた。混乱と焦燥で、その急変についていけない。

「他の方ばかりじゃなくて、わたしの事も抱いてください」

「ええっ？ ……きゃあっ!？」

言うなり彼女は、透の首筋に吸いついた。別に強く吸引されたわけじゃない。軽く、掠めるように頸動脈を撫でられただけ。それなのに、股間が激しく疼いた。尿意を我慢するように、内腿をキュッと締める。

「し、詩乃さん……。こういうのって、ほら、結婚前は……」

そう言いながら、透の脚を、膝から内腿にかけて軽く撫で上げた。さっきの首筋へのキスと同様、掠める程度の接触。なのに、堪らないゾクゾクで歯を食い縛る。

(な、何これ……すつごく……)

その後の言葉を、頭の中で飲み込んだ。こんな強引なやり方をされて、身体が悦ぶはずがない。気のせいだと自分に言い聞かせ、お腹の上の詩乃を睨みつける。しかし彼女は、なぜか目を細めて嬉しそう。

「あはあ……。透さまが、物欲しそうな目でわたしを……」

「ば、馬鹿な事言わないで！ あたし、そんなつもりじゃ……」

自分の身体を抱きしめ悶える詩乃に焦りを覚える。怒ってみせたつもりなのに、うまく伝わっていないだろうか。

戸惑う透を見下ろして、彼女は襦袢の帯をスルスル解いた。前を開くと、その下はパンツさえ穿いていない完全な裸。前にも見た羨ましいほどに白い肌と豊満な乳房、妬ましいほどに細いウエスト、そして意外に濃い恥毛を、惜しげもなく見せつける。

同性の裸に、生唾を飲み込んだ。彼女の淫靡な微笑みに見下ろされ、どういうわけか胸が高鳴る。浮気の罪悪感や謀られた憤りを、忘れてしまいたいそうになる。

「透さま……。わたしと、愛し合いましょう……」

綺麗な裸が、降ってきた。透は目を逸らせない。呆然と見詰めたまま、頬を掌に包まれる。詩乃の顔がわずかに斜めになって、その目がゆつくりと閉じられる。



「ふああ……」

彼女が喘いだのかと思った。でも、震えているのは透の喉。左右に動く彼女の唇で唇を撫でられ、頭の中が芯まで痺れる。

「ど、どうしてこんな……こんなに……。あ……！」

キスに感じている場合じゃない。そんなつもりじゃなかった。なのに、チュッチュと繰り返し吸われるたびに、快感が大きくなる。まだ舌さえ使っていないのに、異様なほどの気持ちよさで背中が勝手に悶え始める。

(し、しっかりしなさいよつ。あたし、この娘と別れるんじゃないの!?)

その意思とは裏腹に、身体が快感の方へ流される。彼女の腕が首に回された。しっかりと身体を重ね、濡れた舌が入り込んでくる。透は拒むどころか、自分から唇を開いて迎え入れてしまう。

「あ、あたし何を……。でも、あ……。あんっ」

「はあ……。透さまとのキス、夢のようですよ……。気持ちいい……。ちゅ、ちゅるっ」

詩乃の舌が絡んでくる。先端を突き合うだけの、控えめな舌愛撫。気持ちいいけど刺激が弱い。その物足りなさが畏だった。焦れた透の舌が、本人の意思とは無関係に彼女のものに挑みかかった。ざらつく表面同士を擦り合わせ、螺旋を描くように絡みつかせる。

「あふうん」

自分で仕掛けておいて、透は堪らず喘ぎを漏らした。その声で少し我に返り、唇を離そ

うとする。でも、今度は詩乃に捕まった。透の舌を逃がすまいとして唇で挟み、扱くように吸い上げる。

「んふ、透さま、いい顔……。ちゅば、ちゅば、ちゅ、じゅるるっ」

舌を吸われるたび、まるで催眠術にかかったように視界が霞む。なまじ玲奈に教え込まれたキスの快感が、透を捕らえて離さない。

「んあ、あう、ふああっ……。し、詩乃さん……」

「透さま、さつき申しました。詩乃です。詩乃……と、お呼びください……」
「し、詩乃……詩乃……。ん、ちゅうううっ」

名前を呼ばれて、彼女のキスはより複雑になった。根元に痛みを感じるほど強く吸ったかと思えば、くるくると巻きつけるように回転させる。透はそのすべてに翻弄されて、その動きを真似してしまう。

（あたし、どうしちゃったの？ 別れるつもりだった娘とこんなに……）

どうして、これほど簡単に唇を許してしまっているんだらう。確かに彼女は嫌いじゃない。可愛いとも思った。でも、それだけが理由じゃない気がする。

戸惑いながら口づけていると、ふと、詩乃が細かい声で透の名前を呼んだ。

「透さま、好き……。透……。さまあ……」

小さいのに、悲痛な叫び。いつもの呑気さとは違う切なさに、ハッと胸を衝かれる。

普段の詩乃の言動は、惚けているようにしか見えない。でも、肌や唇を通して懸命さが

た。彼女もすぐに気がついて、しまったと苦笑いで舌を出す。

「まあ性格というのもありますし、急に言われても難しいですよね。……分かりました。この不肖のメイドが、練習相手になりましょう」

「練習って、何の？」

「素直になって、お二方と仲直りする練習です」

透は希望の光を見出し、背筋を伸ばした。それができるなら、ぜひ教えて欲しい。どんな練習が必要なのかと期待していると、史未が眼鏡を外した。胸元のリボンも、衣擦れの音を立てて襟から引き抜いてしまう。

「あの……あたしは何をすれば……」

目を細めながらブラウスのボタンを外すメイドさんに、変な予感で身が硬くなる。

「そうですね、まずは……私を見て、好きと言ってください」

「史未さんの事を、ですか!？」

それが本当に練習なのかと、不信感があからさまに顔に出た。しかし彼女は特に困った様子もなく、透の手を取り自らの肩を掴ませた。

「詩乃お嬢様でも、藍沢さまでも構いません。相手の顔を思い浮かべて、その方の目を真っ直ぐに見て、好きですと言うんです。いいですか、ごめんなさいではありませんよ？」

最後の部分で、そういう事かと納得する。彼女たちと関係をやり直したいなら、そこから始める必要があるのだと、史未は教えてくれている。

透は目を閉じ、二人の顔を思い浮かべた。たった二文字の、簡単な言葉。なのに、唇が固まって動かない。一分近くも逡巡し、喉に詰まった息を吐き出すのが精一杯。

「あの、史未さん……ごめんなさい……」

彼女の肩に乗せていた手もだらりと落として項垂れる。そんな透を、メイドさんが呆れ声で叱責した。

「もう、ごめんなさい禁止と言ったでしょう！ だいぶ緊張しているみたいですね。仕方ありません、まずは身体の方からほぐしましょうか」

「は、はい……ひゃんっ!!」

パジャマの上から胸を揉み上げられた。びっくりして後ろに倒れそうになる透を片腕で抱きとめ、さらに強く揉み上げる。

「ちよつと、史未さん……マッサージとかじゃないんですか!?!」

「マッサージですよ。身も心も解きほぐすには、これが一番です」

耳元に吹きかける吐息が、熱い。いつもとぼけているメイドさんの囁き声が、低くて妖しい。予想外の事に動揺していたら、耳朵をべろりと舐められた。ゾクリとする快感に身を硬くした瞬間、パジャマのボタンが上から二つ外されて、彼女の手が侵入してくる。

「ひぁ……!!」

指先がダイレクトに乳首を捉える。それで初めて、自分がブラをしていないのに気がついた。着替えさせられた時に外されたのだろうけど、乳房を触られた事よりも、知らない

うちに見られた事が恥ずかしい。

「あの、駄目ですつ。あたし……。これじゃ二人に……。あんつ」

ジタバタ暴れて彼女の手から逃れる。しかし、あつさり捕まって背後から抱きすくめられた。再び胸に手を入れられただけじゃなく、膝を彼女の脚で広げられ、逃走を図る前よりもがっちりとホールドされてしまう。

「お二人に顔向けできない？ 浮気になっちゃう？ そういう硬い考え方をほぐすためのマッサージュですよ」

「さ、さつきは誰でもいいわけじゃないって……。ふあつ」

矛盾で訳が分からなくなつて、肩を疎める透の頬に、史末の唇がそつと触れる。乳首も優しく転がされ、淡い痺れが肌の表面を広がるように走っていく。

「透さま、これは私の手ではありません。詩乃お嬢様の手です。そして、藍沢さまの唇です。お二人に抱かれながらだと思えば、告白もしやすいでしょう？」

「そんな、滅茶苦茶な……」

「ほらほら、早く想像しないとメイドさんに抱かれて浮気になっちゃいますよ。まあ、すでに二人も好きになつているわけですし、今さらですかねー」

「ええつ、それ言うの!!」

さつき言及されなかつたから油断していた。それが悩みの根本なのに、解決を放棄したように身も蓋もない。

「んふふ、私も三人目として参戦しちやおうかなー」

「あつ、そこは……はあんっ」

史末がパジャマのズボンに手を突っ込んだ。下着越しに恥裂を撫でられお尻が強張る。そちらに気を取られている間に、上着の方のボタンを一気に全部外された。乳首を転がしながら、円を描いて膨らみを捏ねる。下半身と上半身を同時に攻める、流れるような愛撫はさすが大人。

（つて、そんな感心してる場合じゃ……!）

彼女は何かしたいんだろう。メイドなのに、詩乃への裏切りにはならないんだろうか。でも、そんな疑問を差し挟む余地のないほど史末の愛撫は巧みだった。ほとんど力を入れない微細な振動だけで、胸や股間に堪らない快感が広がる。

「あ、あ、あつ……」

彼女の腕の中で、小刻みに身体が震える。逃げようという意思が簡単に挫かれる。

「教えてください。詩乃さまは、どんな風に触れてきましたか。藍沢さまは？　こうでしょうか。それとも、こんな感じ？」

乳首を優しく転がし、かと思えば強く抓る。あるいは淫裂を縦に引つ搔いたり、円を描いて撫でてみたりと、ひと言ごとに愛撫の調子が変わる。

「そ、そんなにされたら……んあつ……あふ……つ」

様々に変化する快感に翻弄され、思考が鈍る。でもその中に、ふと、馴染みのある動き

を見つける。

「ち、乳首……もつと強く……強く抓って……!!」

「こう？」

「あ、あうん!!」

二本の指が左胸の先端を絞り上げた。痛みと紙一重の快感で淫裂から大量の蜜が漏れ、下着に染み込んでいく。

「凄おい、熱いのがいっぱい溢れて……。パンツの内側で、いやらしい襞々が蠢くのを感
じます。透さまって、意外と痛いのがお好みだったんですね」

「ち、違……。だから実況しないでっば、ばかぁ……」

思わず涙声で抗議して、でも背後からの返事はない。終わったのだらうと思った瞬間、
下着の中に手が突っ込まれた。

「ひ……!!」

「ほら、やつぱり濡れ濡れ。とつても熱くてふやけちゃいそう……。んふ、凄おい。透さ
まの襞々が指に吸いついてきます」

「いやぁ……。いやぁあぁん……」

自分の性器が、生き物のように彼女の指に絡みついていく。そんな卑猥な光景が頭の中
に浮かぶ。気を失いそうなほど恥ずかしいのに、胸が弾む。お腹の奥が熱く疼いて堪らな
い。こんな体験、前にもした事がある。



「あとは、どうして欲しいの？　どんな事をされたい？」

「もっと……もっと乳首痛くして……あと、首、舐め……ふはっ!!」

言い終わるより早く、首筋を舐め上げられた。最初はくすぐるように細やかな動きで、次に吸いつくようにねっとり。それを交互に繰り返されて全身が震える。脚の間で性器が収縮し、さらに大量の恥蜜を吐き出す。

「あは、またアソコが動いた……。気持ちいいのね」

「あふ、ん、うん、きゅふんっ」

甘い囁きに、喘ぎ混じりでココココと頷くだけ。自分のリクエストのせいとはいえ、まるで彼女が詩乃や玲奈とのエッチを見ていたかのように、愛撫の再現度が上がってゆく。相手は史未だと分かっているにもかかわらず、快感による混乱で、二人に抱かれているような錯覚を起こし始めていた。

「あああ……あたし、一体……」

「こっちは、どうして欲しいのかしら」

混乱に乗じて畳みかけるように、下着の中で指が動いた。人差し指と薬指で淫唇の襞をくすぐり、中指が膣穴の入り口を抉る。

「ひっ！　そ、それ……そこ、穴のそこ、もっと撫でて………んふあっ」

ひと擦りごとに抵抗感は薄れ、誘導されるまま希望を口にする。それに応えて、細い指先が膣口の縁で円を描いた。たっぷりの潤滑油で、敏感な性器粘膜を撫でて、透を引き返

せない領域まで昂らせていく。

「こ、こんな……こんなに……。ああああ……」

彼女の肩に頭を乗せて小刻みに震えていると、耳元に「脱いで」と小声で囁かれた。何を、と問い直す事もなく、透は腰を浮かせてズボンと下着をお尻から剥いた。

「はあ……」

解放感で声が漏れた。太腿や股間が空気に晒されるのが堪らない。まだパジャマの上が残っているとはいえ、部屋で全裸になる事に、すっかり抵抗がなくなっている。その事に若干の問題を感じながらも、自ら大きく脚を広げ、彼女が性器を嬲りやすいように協力するのを最優先にしてしまう。しかし、このメイドさんは想像以上に意地悪だった。

「見て見て透さま。そこ、水溜まりができてますよ。お漏らししたみたい」

「え……？ やん、だめえ。見ちゃダメえ！」

見下ろすと、シートに大きな染みができている。そういえば、さっきからお尻の谷間を流れていく感覚があったけど、そんな事になっていたなんて。

でも、そんな秘密を暴露されたのに、身体は脚を閉じようとしめない。髪を振り乱して抵抗する素振りを見せるだけで、激しい悦びに貫かれてしまう。それをいい事に、史未は派手に恥裂を掻き回し、大きな水音で透の羞恥を煽り立てた。

「いやああ……。こ、こんなの……こんなのお……」

「いい子ね。ご褒美に一回イカせてあげる」

涎を垂らして悶える透の頬に、史未が軽く口づけた。上擦った声と共に、責めが淫裂に集中する。中指で、縦筋の中心を素早く擦る。

「あ、ああ……んあああっ！」

一定のリズムを保っているのに、透の性感が昂っていく。喘ぎのトーンも高くなる。我慢できずに全身で悶えるけれど、お腹をがちり抱きすくめられ動きを制限される。その欲求不満が全部股間に集中して、快感を増幅させる。

「透さま、イキたい？」

「イキたい！ イカせてええ！」

我を忘れて絶叫する。その瞬間、指が二本に増えた。淫唇を激しく震わされ、一気に昇りつめてしまう。

「ふあう、あう、イツちやう、ンああああっ！」

腰や内腿が跳ね上がる。痙攣する身体を、史未が背後からしつかり抱きしめる。でも、その指先の動きが妖しかった。脇腹から乳房の裾辺りを軽く撫で回す。絶頂した身体をなだめるといふより、過敏になった肌を刺激しているようにしか思えない。

「あ……あんっ。史未さん、そこ……そこは……ひんっ」

感じすぎて我慢できない。身を振って抵抗する。彼女はそんな透をベッドに横たえ、上から覗き込みながら頬を撫でた。

「どうです、我佢が言えるようになりましたか？ その調子で、あのお二人にも言いたい

事を言えはいいんですよ」

彼女の指が、頬から顎、首筋をなぞり、乳房の頂上をツンとはじく。透は身体を小さく跳ねさせ、しかし彼女の意図に異議を唱える。確かに、愛撫のおねだりではできた。

「でもそれは……史未さん相手だからで、詩乃たちに気持ちを言うのとは別問題のような気が……。だいたい、そういう事を教えてくれるのはありがたいですけど、他にやり方があるんじゃないですか!？」

真っ赤になりながら両手で胸を隠すと、彼女は片目を閉じてぺろりと舌を出した。

「ばれちゃいました? 実は、詩乃さまが夢中になる透さまを、私もちよ〜つと、つまみ食いってどうか、味見してみたかったものですから」

「……はあっ!？」

啞然となつて声が裏返る。彼女は視線を外し、取り繕うように声を張った。

「でもまあ要するに、気持ちいい事に夢中になると同じくらい、無心になつて二人にぶつかれて事です!」

冷や汗を掻くメイドさんを、猜疑心さいぎしんに満ちた目で下から眺める。戸惑いは否めなかったけど、それでも迷える透にエッチをするのは、深慮があつての事と思つていたのに。

「胡散臭い……」

つい不満が口に出る。すると史未は静かに身体を起こした。無言でメイド服を脱ぎ捨てて、下着とストッキングだけになる。顔は笑みのままだけど、口元が引き攣つて見えるの

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>